

●特集● 幼稚園・保育所と小学校のつながり

今回の特集は、日本保育学会第59回大会の大会準備委員会企画シンポジウムⅣにおけるテーマをそのまま引き継ぐこととした。今号の発行は1月であり、子どもたちは、幼稚園・保育所を修了し、小学校に入学する時期を迎える。本学会には幼稚園教諭、保育士、小学校教諭として日々子どもと生活している会員が多く、この問題が切実なものとして立ち上がってくる時期を迎える。今この時期に、そのような立場の会員とともに、大会での議論を再検討してみたいと考えた。

「幼稚園・保育所と小学校のつながり」の企画シンポを終えて

酒井 義信

幼保・小の連携が叫ばれながらも容易に進展していないのはなぜなのか。子どもの発達に連続しており、お互いの指導者がお互いの教育について十分に理解してはじめて可能となる取り組みである。そこで、実践を交流し討議の中から、成果や課題を明らかにしたいとの趣旨でシンポ開催が決まった。

大会当日は話題提供として ①札幌市の認可保育所での連携、交流の現状や課題について（アンケート調査から）、②伊達市立伊達小学校と伊達市立さくら幼稚園の共同研究による実践、③お茶の水女子大学内での共同研究による附属幼・小の実践について報告が行われた。

①では、小学校行事への参加や低学年との交流、小学生が保育園を訪れての体験学習、という子ども同士の交流活動が連携・交流の中心になっている。その交流後に、保育園児は学校を身近に感じられるようになったり、就学に対して安心感や期待感がもてるようになった。②では、合同研修会で保育や授業の参観を行い、お互いの教育課程の理解や子どもたちの合同活動のあり方について話し合われた。その結果、指導内容や方法の理解が十分図られ合同活動が行われた。③では、幼稚園入園から卒業までの9年間の連続した学びの姿を探り、子どもの発達に即した幼・小接続期のカリキュラムを作成した。この時期の成長に必要な事柄を適時性・連続性を考慮し、保育・学習分野のカテゴリ

ーとして分類し滑らかな接続を図ったことなどが紹介された。

③の附属幼・小の研究から明らかにされた1) 連携カリキュラムは小学校にあわせてつくるのではなく幼稚園から小学校へとつくり上げなければならない、2) この時期の子どもにどんな教育が大切なのかを共通理解して作成すること、3) そのために保育や授業と一緒に参観して具体的な子どもたちの活動について話し合いながら研究を進めてきた、との接続期のカリキュラムづくりのポイントは、今後の研究や実践での参考となるだろう。

報告・討議から成果やポイントをまとめると、次の4点に集約される。①交流や合同活動によって、子どもは安心感をもち接続への不安が減少し、接続が容易になった。②お互いの指導者が、保育や授業と一緒に参観して具体的な子どもたちの活動について話し合うことは、お互いの教育課程や子どもの実態が理解でき、それぞれの指導に生かすことができた。③遊びなどを中心とした体験活動は、幼保・小の合同活動や接続期のカリキュラムにおいても中心的な活動となった。④交流や合同活動は指導者だけの考えでなく、子どもの声や表情も参考にして進めることが大切である。

幼稚園は教育要領、小学校は学習指導要領によって教育が行われているので、教育・学習のスタイルが大きく違う。生活でも、幼稚園は時間的にゆとりがあるが、小学校は6歳から12歳の子がいるので、6歳の子にとってはゆとりのない時間設定である。こうした実態がもっとよくわかれば、スムーズな接続のためにお互いが何をしたらよいかが見えてくるであろう。

だが、現場の教師がお互いの教育を参観に行くことは時間的に非常にむずかしい。園や小学校の子ども1日の生活の解説入りビデオを学会が製作し、ホームページ上で視聴できるようになれば、お互いの教育を知ることができ、連携やスムーズな接続に向けての話し合いが生まれてこよう。

●Profile

酒井 義信 (さかい よしのぶ)

恵庭市立柏小学校 教諭

関心あるテーマ 幼児の「数量概念」の育成

幼稚園・保育所と小学校のつながり

児嶋 雅典

提案者の一人である酒井氏からこの企画の趣旨説明があり指定討論者の依頼を受けた。幼児の発達は連続しているのに保幼・小の連携は一部では取り組みが始まっているものの全国的に見れば遅れている。保育者養成校の教員としての考えを示してほしいとのことであった。

保幼小の連携に関心はあるものの、実際には小学校の教師を交えた話し合いの経験は行政主導のものを除けばほとんどない。この種のもの短期で終わり、継続されることは少ない。双方に子どもの発達に関して連携したいという意識が弱いこと、また継続して交流を深めるほどの日常的な関係がないこと、そして時間の調整が難しいなどの理由から義務的になりやすいからである。しかし、最近になってようやくその見通しができた。そのきっかけは保育士の卒園児への思いであった。家庭の問題や発達上の問題を抱えた子どもたちが小学校でどうしているかという思いである。だが、直接、小学校に連絡を入れることは気後れするらしい。現状では、相手の実践への批判になりやすく双方が警戒する傾向があるからだ。たまたま知人がその小学校1年生の担任であったことから、あまり警戒することなく実現した。このように考えると連携に必要なのは教師間の日常的な交流だと思われる。双方に警戒心や不信感があると連携にはなりにくい。

シンポジウムでは三つの話題提供がなされた。札幌市の認可保育園の事例は小学校行事への参加や低学年との交流、保育園を訪れての体験学習などが紹介され、それぞれの利点について報告された。現在、最も多い形の保幼・小の連携であるが、望まれるのが教師間の日常的な交流であるとする、まだ始まったばかりでありこれからの課題は多いと思われる。

伊達小学校と幼稚園との連携は文部科学省の指定を受けての事業である。連携の方法としては子ども同士の交流にとどまらず教師同士の交流を進めるために年に数回の合同研修会が実施されている。そこからお互いの教育課程の理解が深められ、自分たちの考え方やアプローチの仕方を自覚できる可能性が生まれることは成果であるが、具体的な内容は分らなかった。

文部科学省の研究指定を受けたお茶の水女子大学の附属幼稚園と小学校との連携では接続期（年長後期から小学校の1学期まで）の教育課程を作成する実

践がなされている。いわゆる一貫カリキュラムが開発され、小学校か幼稚園かという二者択一的な発想はなされていない。その点は興味深いし、示唆的である。だが、これはお茶の水大学だからできる実践かもしれない。

連携には二つのことが求められると考える。一つは教師間の日常的な関係の確保である。行政主導によるパイロット的な試みは重要だが、その後も継続されることが大切だからである。そのためには義務的な関係ではなく、日常的に協力できる関係が必要になる。もう一つは幼児期と学童期の連続性の確保である。乳児から学童中期頃までの発達の流れを線としてとらえることである。いわゆる遊びと教科との連続性である。直接経験中心の幼児期と経験したことを言葉で整理する学童期との連続性の確保である。この方法の違いは言うまでもなく発達の違いに対応している。

幼児は紙飛行機や凧、パラシュートなどの遊びが好きである。いろいろ工夫しながら、より性能の良いものを作ろうとする。子どもたちは折り方はもちろんだが、紙の種類や大きさ、力加減などを考えながら友達と飛距離を競ったりもする。知的好奇心の表れであるし、ある程度の因果関係にも気づいている。どんな遊びもこのような要素を含んでいる。こうした経験を多くするからこそ学校で空気や抵抗、揚力という概念を学ぶと、それまでの経験とその言葉とが結びつき、知識が整理され認識へと高まるのである。経験と教科との連続性の典型である。小学校の教師との遊び研究により教科との連続性が明白になり、より確かな連携になる。

●Profile

児嶋 雅典（こじま まさのり）
 松山東雲短期大学 教授
 専門領域 保育学、保育者養成
 主な研究テーマ 保育実践現場と保育者養成
 保育における遊びと教科との連続性

幼小連携研究の課題 —保育学会発表から

倉持 清美

日本保育学会第59回大会での保幼小連携の分科会では7つの口頭発表が行われた。これらの研究は、対象とする内容によって大きく3つに分けることができる。第一に幼小の子ども達の交流活動を対象とした研究では、双方の子ども達にとって意味のある交流とは何かが探求されている。「幼小交流活動における遊びについての一考察」（関仁志氏）では、幼児と小学

生双方にとって効果のある交流活動としてどんな遊びが考えられるかを検討している。第二には、幼小のカリキュラムに焦点をあて、幼児が無理なく小学校へつながっていくために必要なカリキュラムが検討されている。「幼小連携についての一考察—幼稚園教育要領と学習指導要領（生活科）の関連性から」（北島信子氏）では、幼児期の具体的な活動や体験から学びへつながっていくような連携の必要性が報告された。「幼小接続についてのカリキュラム論的検討1」（玉置哲淳氏、戸田有一氏、瀧川光治氏）では、遊びを大切にする幼稚園のカリキュラムが接続とどのように関連しているかが調査された。また、「幼稚園教諭が考える教育課程の編成のありかた—発達の区切りと教育課程の編成との関連」（樟本千里氏、上田七生氏、山崎晃氏）では、幼稚園教員に幼稚園教育から中学校教育までの年齢段階でどのような区分が望ましいかを質問紙で調査し、教育課程の新たな編成の可能性を示唆している。第三に教員間の交流に焦点をあてた研究は、小学校教員の保育理解を検討している。「幼小連携の現場にみる実践知の相違」（相馬靖明氏）では、交流活動への関わり方の保育者と小学校教員のずれに着目している。お互いへの違和感を乗り越えようとする中で互恵的な関係が生じることを示唆している。「幼保・小の連携に関する研究—保育の理解を促す公開保育について」（横井志保氏）では、小学校の教員に保育を理解してもらうための公開保育のあり方について報告している。「小学校と幼稚園の人事交流：小学校教員の幼児教育経験」（倉持清美）では、小学校教員が幼稚園で保育を三年間実践した後小学校に戻ったとき、入学してくる子どもを連続的に捉えられるようになっていくことが示された。

これらの交流活動、幼小のカリキュラム、教員の交流を対象にした研究が深まれば深まるほど、小学校との相違も明らかになってくる。異なる発達段階の子どもを対象としていること、教育形態の違い、指導要領と教育要領の違いなどから、異なるところはある。報告された研究が示すように、その違いを子どもに視座をおいて捉え直し、お互いのしていることを理解することでスムーズな接続へつながることができるだろう。今後も、こうした研究を積み重ねることで、互恵的な関係の中で保幼小の連携が進められ、子どもにとって意味のある段差を大切にしつつ、効果的な接続とは何かを明らかにすることが可能になるだろう。

一方で、小一プロブレムなど接続期の問題はおさまる心配がない。ここで対象となった研究も含め、

幼小連携の研究は、学校・幼稚園の場での連携を扱うものが多い。しかし、小学校への移行に伴う変化は、子どもの生活全体におこる。家庭での生活にも当然変化をもたらす。幼小が上手く連携して子どもの接続期を支えるためには、家庭が果たす役割も大きいだろう。学習面にとどまらず生活面でのスムーズな移行を考えたときに、移行に家庭がどのように関わっているのかを検討することが、今後の幼小連携の研究には必要と考える。

●Profile

倉持 清美（くらもち きよみ）

東京学芸大学教育学部

幼稚園などのフィールドで子ども達を観察する手法で研究することが多いです。研究内容は、幼児の仲間入りの際のコミュニケーションや小学校教員の保育経験、中学生の保育体験学習の効果などです。

保・幼・小のつながりについて 考えること

高尾 恵子

保育を学び、教育の世界で仕事をするようになって数年、戸惑いや衝突が繰り返しあったように思う。子ども一人ひとりに向かうことの難しさや、育ちをサポートするための工夫の大切さなど、考えることは多くある。私の勤務する学校は、保育園・幼稚園との勉強会や交流活動などを特別行っていない公立小学校だ。公立小学校においても、子どもに無理のないゆるやかなつながりの実現に向けて取り組んでいかななくてはならない課題は多いと感じている。

小学校からの学習では、学習指導要領において、指導する内容・範囲・段階がはっきりと示されている。加減法は1年生、九九は2年生というように決められた期間の中で決められた学習をマスターしていくことが求められる。それに加え、人との関わりや環境への対応なども、学年によって求められることが大きく変わる。高学年に向けて、下級生への手助けや行事の責任、学校の運営など、求められることはどんどん大きくなっていく。それは、児童の能力に適して、というより、ある学年に到達したら通過すべき仕事として待ち受けられている。先日も、私の勤務校で就学時健診があった。5年生の児童が年長児とペアになり、手をつないで校内を回りながら歩いた。5年生の中にも、健診の順番を覚えられない児童や人と話するのが苦手という児童ももちろんいる。それでも、どの児童も着替えを手伝ったりトイレに案内したりして、この活動に取り組む。その結果、5年生はこの様な活動を通して、来春入学してくる年長児のことを楽しみに思い、年長児にも入学を楽しみに思ってもらいたいと願って活動に取

り組むことができた。

学校では、行事や活動が先にあり、それに合わせて気持ちや生活をつくっていくという形で成り立っている。決められた行事や決められた活動・学習範囲のなかで、児童の育ちに合わせて生活をつくることができる範囲はごくわずかである。だからこそ、今、この人にとって、この集団にとって、この活動が大切だと思ったときに、すぐに取り組むための工夫が必要だと考える。

入学式を終えてからの1ヶ月、新1年生は教室の前までお母さんと離れられなくて泣いていたり、授業が始まっても帰りたいと訴えたり、休み時間に遊び始めると、時間が過ぎても遊びを止められずに教室に戻ってこられなかったりと、学校の生活に慣れるまでの彼らの姿がある。このような状況の中で、できるだけ早く彼らが学校生活の流れを掴むために、学校側は新入児がなじみやすい環境を整え、わかりやすく無理のない時間設定をする必要があると思う。保育園・幼稚園ではどんな時間の流れ・環境の中で生活してきたのかを知り、彼らがそこで遊びを通してどんな関わりしてきたのかを知ることは大切な情報収集になる。学校側は、彼らの得てきた学びが、新たな環境の中で、どう生かされるのかを見守ることから始めることが必要だと思う。

小学校教諭として、私は、新入児がどのようなサポートを受け生活してきたのか、保育のあり方そのものを理解する必要があると思う。そして子ども一人ひとりが得てきた生活経験や学びがどんなものであったのかをしっかりと知ろうとすることが大切だと思う。新しい友達や場所の中で、得てきた学びが生かされ、さらに広がり深まっていくためのサポートをしていけるような環境を整えていきたいと考えている。

●Profile

高尾 恵子 (たかお けいこ)
東京都公立小学校教諭
関心のあるテーマ：子どもの表現活動ややりとりを重ねて学びを深めていく過程に興味があります。

幼小のつながりを考える

川崎 徳子

私の勤める園と隣接する附属小学校では、文科省の研究開発学校の指定を受けたこともあり、子どもにとってのつながりのあり方について研究に取り組んだ。その研究と実践で感じた連携における現実的な私の体験と実感について触れてみたいと思う。

幼小のつながりということ子ども視点で考える

と、幼稚園の卒業から小学校への入学という一連の流れも、子どもにとっては幼児教育から小学校教育という二つの体制的な変化を体験していくことになる。子どもには、それぞれのシステムや教育のスタイルの違いが「隔たり」になり、大きな環境の変化は「段差」として体験されることもある。幼小の教師が、この移行に目を向け、それぞれの時期の子どもたちの経験をお互いに視野に入りながら育ちの見通しを広げていくことは、現実的につながっていくための実践を考えるにはとても大切である。

私たちの研究も年長から小学校低学年を「つながりの時期」という共通の視点で捉え直すことから始めた。また、子どもが直接生活の中でつながりや見通しをもてる機会として、年間を通して年長児と1年生との交流を位置づけ、一方的ではなくそれぞれの生活がより充実するような流れと活動を考えたのである。

初めは違いに目が向き交われない感覚に足踏みすることもあった。しかし、幼小の教師がお互いの実践に触れながら自分の実践の見通しを広げ考えていく過程の中で、子どもにとってのつながりの前に、そこに教師にとっての必要な体験があることを何より実感したのである。交流を含んだかわりがそれぞれの生活に入ってくると、教師の意識は同じ活動空間に「ある」ようになり、具体的な子どもの姿を話す機会も増えて、それぞれの独自性を認めながら子どもの育ちと一緒に考えていくようになる。育ちの捉えや見通しの広がり、お互いの実践や指導の方法から学ぶことも大きい。教師同士の心的距離が縮まり、同じ土俵で目の前の子どもたちの育ちを自分のこととして暖かく見つめるようになることはとても大事なことだと感じている。それは、それぞれの子どもを気になるという観点ではなく、育ちの見通しをもって受け止めたり支えたり、教師同士が信頼しあえたりすることにもつながった。実際の交流場面でも、幼小の教師の役割にかかわらずそれぞれのねらいを生かしながら、場に合わせて役割を代わり合い柔軟に動けたことにも生かされた。

それぞれの教師がつながりを意識し、一緒に活動を進めながら同じ空間に過ごす体験は、教師同士の意識を近づけ、同じ方向で子どもの現実を見つめることになる。そしてそれは、幼小のつながりを支える実践を生み出す。今後を考えると、実践が積み重ねられ常につながりとして位置づく体制が固まっていくことが大切であるのだと思う。

●Profile

川崎 徳子 (かわさき とくこ)
山口大学教育学部附属幼稚園
「遊ぶことと育つこと」「心」と「私」の成り立ち「子どもの育ちと保育、保育者の役割」等に関心をもつ。また、臨床心理学を専攻し公立小学校も経験したことをこれからの保育や子どもの世界に生かしたいと思っている。